

第44回日本血液事業学会総会誌上発表にあたり

第44回血液事業学会総会長 椿 和央

2020年10月時点での新型コロナウイルス (COVID-19) 感染者数は全世界では約3,500万人、死亡者数は100万人を超えています。我が国ではそれぞれ8,563人、1,571人になっています。今年1月の豪華クルーズ船騒動、4月の非常事態宣言、7週後の全面解除、8月上旬の感染者数の再増加、その後の下降傾向で9月下旬からのgo to travelキャンペーン等、本ウイルスに翻弄された数か月でありました。このような変化する状況の下、3月19日に公表された新型コロナウイルス感染症対策専門会議での状況分析、提言をもとに学会開催の是非について決定しなくてはなりません。感染、拡大予防のための手指の洗浄、消毒やマスクの使用はできたとしても、いわゆる3密(密閉、密集、密接)を避け、密接に関連しますが、十分なsocial distancingを保つことは困難です。少人数参加での開催、Webを利用する方法、あるいは両者を併用したハイブリッド開催等も考えましたが、予算、学会場、配信方法(当時)および学会運営などを考慮すると断念せざるを得ないと判断しました。学会員の方々の安全と健康を守ることも重要です。血液事業に携わる方々が一堂に会する機会はこの学会しかありませんし、日々研究や一連の業務を通して得た知見や問題点、改善点を話し合い、討論する場を提供出来なかったことに心よりお詫び申し上げます。

上記の理由で通常の総会形式は中止としましたが、何かの形で今学会のテーマに関連したもの、新しい知識を得ること、学会員がモチベーションを落とさずに業務、研究活動を継続できるか等を考え、誌上発表にすることに致しました。全てを発表するわけにはいきませんので次のものに限らせていただきました。

I) 特別講演、教育講演

今回の学会のテーマは「これからの血液事業—未来へのメッセージ」でした。今、時代は大きく変わろうとしています。グローバル化のため、人々や物の交流が盛んになり、通信や情報技術の急速な発達により5G等、さらに高度な技術導入が予定されています。ビッグデータの解析、応用や人工知能(AI)による様々な方面への導入が行われようとしています。このような状況下で血液事業に関わる者にとって、これからどのように変わっていくのか、変わっていかなくてはならないのか、熟思していただきたいと考えました。機構や組織は新しいものを採り入れていかなければ疲弊し、退廃しますし、働き甲斐のある場は未来への志向がはっきり示されています。今回の講演がそのきっかけになればと思いました。

II) 特別企画

① カイゼン活動本部長賞

今までこの学会は血液事業に対して果たしてきた役割は大きいと思います。第41回の総会(入田和男総会長)のテーマは「カイゼン」、第42回(中島一裕総会長)は「持続と変革—カイゼンの先への挑戦」でした。カイゼンで甦った企業、業績を著しく伸ばした組織等の講演や討論は非常に有益なもので以後の参考になりました。人口減少の社会となり、少子高齢化に伴い、献血可能な人口の減少とともに、高齢人口の増加のため、一時輸血血液量の需要の増加の予想があり、血液事業はむずかしい局面も考えられました。しかし、予想に反し、輸血用血液の供給量は減少となり、そのため事業規模を縮小せざるを得ない局面に直面しました。一方で、

全国的にすべての分野でのカイゼン活動によって、速やかに対応は進み、事業運営も財政的にも大きく改善されました。このように毎年行われているカイゼン活動を報告いただき、優れたものに本部長から学会で表彰を行ってきました。この活動を中断なく継続し、血液事業の風土にしたいと思っています。

② ブロック血液センター所長推薦優秀演題

広域事業運営になり、各ブロックで特色ある試みが行われています。各地域の血液センターからそれぞれのブロック血液センターに優秀な試みを応募していただき、順位を付けて数題推薦をいただきました。優秀演題は各ブロックから上位1つに限定しました。

③ 第44回日本血液事業学会総会長推薦優秀演題

上記の②の優秀演題に選ばれなかった演題から学会事務局で優秀演題選出委員会を設け、今回特別に誌上発表をしていただき、表彰することにしました。

以上のような分野で講演を予定していた方々に無理をお願いして、短期間の間に投稿をいただきました。本号の学会誌が少しでも会員の皆様に役立ち、これからの血液事業を考える上で参考になれば幸甚です。